

〔平成二三年度哲学会春季大会 研究発表要旨〕

西田哲学における神概念

— 「場所的論理と宗教的世界観」を中心に —

喜多源典

（本学大学院文学研究科 博士課程前期課程）

本発表は、西田幾多郎が最晩年に宗教論を論じた論文「場所的論理と宗教的世界観」を中心に、この論文において西田が提示する神概念に関して考察する。西田の神概念を理解する上で、「逆対応」という宗教的概念が重要であるが、特に「神自身における逆対応」と考えられる側面に着目する。「逆対応」は、従来の西田哲学研究では、「人間と神との逆対応」の事態からのみ捉えられることが多く、「神自身における逆対応」の事態から捉えられることは稀である。西田哲学における神概念を把握するには、「人間と神との逆対応」だけでなく、「神自身における逆対応」がどのような事態なのかを十分に説明する必要がある。そこで、「逆対応」という概念が「場所的論理と宗教的世界観」においてどのように展開されているかを「神と人間との逆対応」の事態に関して確認するとともに、「神自身における逆対応」の事態に着目して検討する。その上で、西田が見出した神概念とはどのようなものであるのかを考察す

る。

1. 逆対応

「逆対応」という概念は、論文「場所的論理と宗教的世界観」において、西田が宗教論や神概念を展開する上で重要な宗教哲学的概念として登場し、西田がしばしば引用する大燈国師の言葉「億劫相別、而須臾不離、尽日相对、而刹那不对」「億劫相別れて須臾も離れず、尽日相對して刹那も對せず」を元に考案されたものである。この言葉から明らかのように、逆対応とは絶対矛盾的でありながら対応関係にある絶対矛盾的自己同一的關係を言い表す術語として多用される概念である。

逆対応は、主に二つの観点、①人間と神との關係構造、②神自身の構造、から捉えられる。各々の代表的な言明を挙げると、①として「我々の自己は、何処までも絶対的の二者と即ち神と、逆限定的に、逆対応的關係にある」(①423)、②として「神は絶対の自己否定として、逆対応的に自己自身に対し、自己自身の中に絶対的自己否定を含むものなるが故に、自己自身によつて有るものであるのであり、絶対の無なるが故に絶対の有である」(①388)というものである。上の引用に見られるように、「神」という言葉は「絶対」や「絶対的の二者」、さらには「絶対の無」という言葉で言い換えられて用いられている。西田は人間と神との關係を考える上で、「絶対」をどう捉えているのだろうか。些か長くなるが三点ほど引用する。

・絶対と云へば、云ふまでもなく対を絶したものである。しかし単に対を絶したものは、何物でもない。単なる無に過ぎない。何物も創造せない神は、無力の神である、神ではない。そこに絶対そのものの自己矛盾があるのである。(①396)

・如何なる意味に於て、絶対が真の絶対であるのか。絶対は無に對することによつて、真の絶対であるのである。絶対の無に對することによつて絶対の有である。(①397)

・自己の外に自己を否定するもの、自己に對立するものがあるかぎり、自己は絶対ではない。絶対は、自己の中に、絶対的自己否定を含むものでなければならぬ。而して自己の中に絶対的自己否定を含むと云うことは、自己が絶対の無となると云うこととでなければならぬ。自己が絶対的無とならざるかぎり、自己を否定するものが自己に對して立つ、自己が自己の中に絶対的否定を含むとは云われぬ。故に自己が自己矛盾的に自己に對立すると云うことは、無が無自身に對して立つということである。(①397)

これらの引用から見て取れることは、西田が考える絶対は、絶対が自己の中に相對立する絶対の無を含むものであつてこそ、真の絶対とされる。そして絶対が自己の中に絶対的自己否定を含むということは、自己(絶対)が絶対の無でなければならぬとされ、故に(絶対の無である)自己が自己の中に絶対的否定を含むとは、絶対の無の絶対的否定態が、絶対の無自身に相對立する(「無が無自身に對して立つ」)ことであり、このことにより絶対は真の絶対たりえるとされる。よつて真の絶対とは、絶対矛盾的自己同一そのものなる事態と言へる。

ここで絶対の無に對立する「絶対の無の絶対的自己否定」態には二つの方向が生じると考えられる。その二つの方向とは、まず一つが、「個物的多(人間・個物)への自己否定的翻転」である。これは「絶対の無の相對化的自己否定態」であり、個物的多(人間・個物)と絶対の無が相對立する事態である。ここで特に留意したいのは、もう一方

向として、「絶対の無自体の自己隠蔽」という方向が考えられることである。これは「絶対の無の超越的自己否定態」であり、絶対の無と「絶対の無の超越的自己否定態」とが相対立すると考えられる。絶対の無を神と言ひ換えて表現すれば、神と「絶対の隠された神」(⑦ 427) とが相対立する事態であると言える。

この二つの方向は逆対応として捉えられ、前者は従来、「人間と神の逆対応」と呼ばれる。そして後者は、西田哲学研究で取り上げられることは稀であるが、「神自身における逆対応」、つまり「神と『絶対の隠された神』の逆対応」として考えられるものである。

2. 人間と神との逆対応

西田は「人間と神との逆対応」に関して、人間の側からと神の側からと両方の立場から述べている。まず人間の側からであるが、以下に三点ほど引用する。

・我々の自己は、どこまでも自己の底に自己を越えたものにおいて自己を有つ。自己否定において自己自身を肯定するのである。
(⑩ 445-446)

・人間より神へ行く途は絶対でない。而も我々は個となればなる程、神に近づくのである。億劫相別而須臾不離、尽日相对而刹那不对である。(⑪ 131)

・相対的なるものが絶対者に対するとは云えない。又相対に対する絶対は絶対ではない、それ自身亦相対者である。相対が絶対

に対するという時、そこに死がなければならぬ、それは無となることではなければならない。我々の自己は、唯、死によってのみ、逆対応的に神に接するのである、神に繋がること云うことができるのである」。(⑩396)

この引用から明らかになることは以下のことである。我々の自己は自己の底に自己を超越（絶対否定）したところで神に接することにおいて真の自己を見出す。しかし人間の側から、人間の自力の行いに対応して漸進的に神に近づく歩みのその果てに神に接しうることとは断じて無いということが強調されている。そして我々人間（の自力）の死を介するような自己の絶対否定によつてのみ神と繋がることとされる。ここで西田の言う「死」とは、文字通りの肉体的死を意味するというよりは、我々人間が絶対他方へと転換する極みにおける「自力の絶対否定」のことであり、自己が他者や世界からのあらゆる個物的限定を超越し父母未生以前の自己を見出す事態における「個物的限定の超脱」に該当するものと考えられる。このように人間からの神へのあり方は、人間の死という厳格な絶対矛盾的側面を重視しながら、同時に絶対矛盾する両者が互いに矛盾しながらも対応している逆対応の元に捉えられている。西田はここに宗教的立場の成立を見ている。

人間と神の逆対応は、人間の側からの一方だけではなく、他方でこれに対応して神の側からも言及されている。ここから西田が独自に捉える神概念の特徴も明らかになる。二点ほど引用する。

- ・絶対は何処までも自己否定において自己を有つ。どこまでも相対的に、自己自身を翻すところに、真の絶対があるのである。
 - ・真の全体的一は真の個物的多において自己自身を有つのである。(⑪398)
- ・極めて背理の様であるが、真に絶対的なる神は一面に悪魔的でなければならぬ。……単に悪に対し之と戦う神は、縦、そ

れが何処までも悪を克服すると云つても、相対的な神である。単に超越的に最高善的な神は、抽象的たるに過ぎない。絶対の神は自己自身の中に絶対の否定を含む神でなければならぬ、極悪にまで下り得る神でなければならぬ。悪逆非道を救う神にして、真に絶対の神であるのである。(⑩ 404)

西田は、超越的に最高善的な神を却下し、神自身が「極悪にまで下り得る」ほどの絶対否定性を帯び、自身を相対的に個物的多(人間や個物)に翻すところに真の神を見ている。ここから、神の絶対否定としての個物的多への翻りには、「逆対応的に極悪の人の心にも潜」(⑩ 404)み、「何処までも」神に「背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追ひ、之を包む」(⑩ 435)神の「無限の慈悲」(⑩ 435)、「絶対のアガペ」(⑩ 404)が働いているということが言える。

論文「場所的論理と宗教的世界観」において、「人間と神との逆対応」は人間の側の絶対否定とともに、絶対者なる神の側にも絶対否定があるということが、個物的多なる人間と絶対者なる神が逆対応的に接するという事態を可能にしているということが述べられている。しかし、ここで留意したいことは、人間の側において、「死の自覚」という自己の絶対否定は神に対するという事態から生じるが、では、神の側において、神が自らを「極悪にまで下り得る」個物的多に翻るという神の絶対否定はいかにして生じているのだろうか。このことを検討するためには、神自身の構造、つまり「神自身における逆対応」(「神と『絶対』に隠された神」の逆対応)がいかなる事態であるのかを解明する必要がある。

3. 神自身における逆対応 — 神と「神の根底」との逆対応 —

先に見たように、逆対応には「人間と神との逆対応」だけでなく、「神自身における逆対応」が考えられた。その内容を再度確認しておく、絶対の無自身に相対立する「絶対の無の絶対的自己否定態」には二つの方向があり、一方は「絶対の無の相対的自己否定態」としての「個物的多への自己否定的翻転」であり、もう一方として考えられたのが「絶対の無の超越的自己否定態」としての「絶対の無自体の自己隠蔽」であった。そして後者が、神と「絶対」に隠された神が相対立する「神自身における逆対応」として考えられた。前項末尾にて、神が自らを「極悪にまで下り得」て個物的多に翻るといふ神の絶対否定はいかにして生じるのかという問題を提示したが、ここで「神自身における逆対応」とはどのような事態なのかを説明した上で、その問題を検討する。また、ここからは「絶対」に隠された神を「神の根底」と仮に名付けた言葉で表現していくことを予め断つておく。

「神自身における逆対応」を考える上で、絶対の無の絶対的自己否定態として、何故、個物的多という相対的自己否定態だけでなく、絶対の無の超越的自己否定態として「神の根底」が考えられるのかという根拠を示しておかなければならない。その根拠として考えられる西田の言明は以下のものである。「神は絶対の自己否定として、逆対応的に自己自身に対し、自己自身の中に絶対的自己否定を含むものなるが故に、自己自身によって有るものであるのである。絶対の無なるが故に絶対の有である」(⑩ 398)。この引用における「逆対応」は、神が「自己自身に対し」、さらには「自己自身の中に」あるものとの逆対応が述べられていると考えられる。つまり、神が自己自身の中にある神と対する逆対応と捉えられる。換言すれば、神と(神自身の中にある)「神の根底」との逆対応であると言える。

このように「神と『神の根底』との逆対応」を理解した上で、先の引用からさらに見て取れることは、神は自己

(神)の底に自己を越えた「神の根底」との逆対応によつて、神は神たり得ているということである。附言すれば、神が神自身を「死する」という絶対否定を為していることにより、神は「神の根底」へと還帰し、「神の根底」の絶対否定即肯定として神自身は甦り、神は神たり得ているのである。

このような「神と『神の根底』との逆対応」の事態に見られる、神が神自身を「死する」という絶対否定は、神自身の最高善的性質の絶対否定であり、同時に神への背きや極悪なるものを自らにどこまでも含み込んだ絶対否定的「死」である。神は神であることを死する(絶対否定することにより「神の根底」へと還帰する。「神の根底」は、神の絶対否定的「死」を包むものであり、神への背きや極悪をも包む無限慈悲なるものである。「神など絶対に無い」という神への背きに「その通りである」と応え、どこまでもこれを包む絶対愛なるものである。「神の根底」は自身の絶対否定的翻りとして神を甦らせる。そして、神は、無限慈悲なる「神の根底」の絶対否定的限定としての神として甦るが故に、神は「極悪にまで下り得」て「何処までも「神に」背く我々の自己」をも包む絶対愛を帯びて、(神の相対化的自己否定態なる)個物的多へと翻ることができると言える。前項末尾において問題提起された、神の絶対否定(個物的多へと絶対愛を帯びて翻る事態)が生じる根拠は、このような「神と『神の根底』との逆対応」の事態に見出されるのである。

ここでさらに重要なことは、「神と『神の根底』との逆対応」という事態は、神の絶対否定性の根拠としてのみならず、「人間と神との逆対応」を成立せしめる根拠としてあると考えられることである。神は神自身の絶対否定により「神の根底」に還帰し、「神の根底」の絶対否定即肯定態として神は神たり得、その神がさらに「人間と神との逆対応」において、神の相対化的自己否定態として個々の人間・個物を創造すると捉えられる。つまり「神と『神の根底』との逆対応」における神を無限創造する働きは、「人間と神との逆対応」における個物的多(人間・個物)を無

限に創造する働きの成立根拠であると言える。この意味で、「神と『神の根底』との逆対応」は「人間と神との逆対応」に対し成立根拠としての内在的超越性を有している。

同時に、「人間と神との逆対応」も「神と『神の根底』との逆対応」もその関係構造の根底には、「断絶即同一」、「死即生」という不可逆的關係が認められる。この不可逆的關係は、「神と『神の根底』との逆対応」と「人間と神との逆対応」との關係にも厳然と存在している。その意味で、「神と『神の根底』との逆対応」は「人間と神との逆対応」に対して超越的内在的であると言える。纏言すれば、「神と『神の根底』との逆対応」は「人間と神との逆対応」に対し「内在的超越」即「超越的内在」的なる關係構造を有しているのである。

結び

「神と『神の根底』との逆対応」は、「人間と神との逆対応」を自己成立せしめる動的多重構造があり、「人間と神との逆対応」を無限創造する働きを有し、その無限創造の働きは、「神と『神の根底』との逆対応」による無限慈悲なる絶対愛なる働きと一つである。ここまでの検討から、西田が見出した神概念は、「神と『神の根底』との逆対応」に着目した観点から、「人間と神との逆対応」と「神と『神の根底』との逆対応」という「逆対応」の全容を捉えた事態そのものに見て取れると考えられるのである。